

## 正名の青春

昭和二十年、それは大東亜戦の終焉の年。私にとって  
は、勝つために生命を賭して一途に生きた時代。それを青  
春というは余りにも佻しいが、しかし、名を惜んで清らか  
に生きて来たことは、今も誇らしく思う。

二月十一日、「学徒勤労令」により、私達は、航空機製  
作のため名古屋の三菱第五航空機製作所に入所した。しか  
し、如何せん、熟練工が戦場に入り出された後の動員学徒  
だけでは、性能すぐれた航空機の製作は覚束ない。果して  
戦場へと飛んだのは何機あったらうか。

日が経つにつれて、敵機の襲来は熾烈の度を加えてき  
た。忘れもしない、三月十一日の大空襲の夜のこと。B29  
の爆音と焼夷弾の炸裂音に目を覚ますと、隣りの寮が燃え  
ているではないか。学友の全ては既に避難し私一人とり残  
されている。夢中でとび出し、知多半島へとひた走った  
が、燃えさかる市街地にとび込んで道に迷い進退に窮まっ



昭和17年頃の愛媛師範学校運動会の貴賓席



昭和19年 西条の倉敷人絹工場へ勤労動員

た。一面火の海で逃れるすべがない。△ここで死ぬのだろうか。死ぬのはいい。だが逃げ惑うて犬死したとは思われたくない▽。豁然として燃えさかる火の海にとび込んでいった。私は、名が惜しかったのである。

七月一日、私は、相浦海兵隊に召集された。三月に硫黄島が玉砕し、六月に沖繩を失った日本は、既に、本土決戦の体勢に入っていた。海兵隊とはいいいながら、訓練は専ら陸上においてであった。その訓練とは、たこ壺ほ

りと匍匐<sup>ほぐ</sup>とである。たこ壺ほりとは、シャベルで人間一人が入って身を隠す程の穴を堀ることであり、匍匐とは、腹ばいで敵に覚られないよう前進することである。来るべき本土決戦に当っては、掘ったたこ壺の中に爆弾を背負って身を隠し、敵の戦車の進撃を待つ。敵の戦車が目前に現われるや、たこ壺から這い出し、匍匐前進して、爆弾を背負ったまま、敵の戦車の下敷になるといふものである。△立派に死のう▽。遺書と遺髪とを郷里に送ってからの訓練は、さわやかですらあった。私は、名を汚したくなかったのである。

——まだ判断力に乏しかった十八歳の頃の話である。——

比治山女子短大新聞（昭・53・2・1）